

## 水中写真家 鍵井靖章氏:フィリピンにて、JBIC 環境保全関連事業を視察

鍵井 靖章さん

1971年兵庫県生まれ。大学在学中に水中写真家を志し写真家・伊藤勝敏氏に師事する。大学卒業後モルディブ、オーストラリア、伊豆でのダイビングガイド業を経て、1998年独立。1998年アニメ賞受賞。2001年ドキュメント写真大賞ネイチャーフォト部門賞受賞。2003年に日本写真協会新人賞受賞。その後、世界の海をフィールドに撮影を続けている。

### 視察事業

北部パラワン持続可能型環境保全事業	珊瑚礁、砂浜、マングローブ林、希少生物等の豊かな自然環境に恵まれた北部パラワン地域において、深刻化する環境破壊を防ぎ、かつ地元住民への代替生計手段を提供し、持続可能な環境保全対策の実施推進をはかる事業。事業効果発現地域である水中を撮影。また、地元住民の生計支援トレーニングを視察。
漁業資源管理事業	全国18湾において沿岸資源管理、漁民の生計向上、全国／地方自治体レベルの体制強化を支援することによって、漁獲量減少を抑制し国民の重要な蛋白源を確保するとともに、漁民の貧困撲滅及び沿岸地域の環境保全対策を確立・推進する事業。沿岸資源管理のための資機材や漁民支援のための(魚の)パイロットファームを視察・撮影後、受益者と意見交換。

—今まで世界中の海に潜り写真を撮っていらっしゃるということで、訪問された国も多いかと思いますが、今回は通常の取材とは異なりフィリピンにおける円借款事業の視察をされていかがでしたか。

**鍵井** 正直、円借款という途上国支援の形態があるのを初めて知りました。ですので、もちろん円借款事業の視察も初めてだったわけですが、自分が払っている税金がこのような国際協力事業にも使われていることを知り、大変興味深かったです。特に、道路や発電所などの大きなインフラストラクチャーの建設のみならず、自分が写真家として活動していく中で最も大切にしている“自然”を保全する事業に対しても日本政府が資金援助を行っていることを知り、興味深いとともに大変嬉しく感じました。



エルニドの海(キンセンフエダイ)

© Yasuaki Kagii (左上の写真除)

—今回、実際に海に潜り撮影をしていただきましたが、いかがでしたか。

**鍵井** 3～4年前に私が初めてフィリピンでダイビングを行った際と同様に、今回も健全な珊瑚のすぐ隣にダ



白化しつつある珊瑚

イナマイトによって破壊された珊瑚があり、フィリピン独特のMari-cultureを再確認しました。実施機関の方の説明によると、このような違法漁業は減ってきているとのことですが、残念ながら皆無ではないようです。また、実際に潜ってみても、珊瑚への被害が大規模なものであることがわかります。このような状態になった以上、その責任を人間が負わなくてはなりません。しかし、自然には自ら蘇生する能力があります。また、人間の持つ時間の長さとは自然の持つそれとは随分と違います。そのあたりを考慮した上で、珊瑚だけでなくこの豊かな海洋資源を、これ以上死滅させないようにしくみ作りが必要であると感じました。今後の海洋保全に対して、違法漁業を行っている漁民の方に理解を求めると同時に、海のみならず、山、川などすべての自然のシステムを包括した対応をお願いしたいと思います。

—また、視察にあたって、海洋資源の保全状態のみならず、事業全体を見ていただきたいとこちらからお願いしましたが、具体的に印象に残った点や気になった点があれば教えてください。

**鍵井** 「漁業資源管理事業」については、) 初日に訪れた実施機関の事務所(事業資金で建設した代替生計支援プログラムのトレーニングセンター)での説明も非常にわかりやすく印象的でした。その後、説明していただいたマングローブの植林地を実際に訪れ、この植林事業が、フィリピン人の気質にあったフェスティバルという形で、老若男女問わず総勢約二、三千人が集う地域に根ざした活動として継続していると知り、非常に良い例だと感じました。特に、子どもたちの参加は、身近な自然に興味を持つ良い機会だと思うし、自分たちの手で植えたマングローブが茂り、その林の向こうに広がる海に魚が集まる。そして再び豊かな漁場となる。成長をともにするマングローブの役割を認識することで、自然保護を意識するきっかけになると思います。もう一つ、プエルトプリンセサおよびホンダ湾にそそぐ川の土壌の流出を防ぐための護岸工事(植林)を視察し、コンクリートのような人工的なものではなく、根の長くしっかりした草や木といった自然を用いた工法で施工されていることを知り、むしろ、コンクリートの護岸ばかりが目立つ日本よりも、(この分野においては)フィリピンの方が先進国なのではないかと思いました。川の土壌流出は海の生態系にも悪影響を与えるため、この取組みは非常に興味深く、日本も見習うべき点が多いと感じます。

また、生計支援プログラムの一つである女性による籠バッグの製造は、特に目立った特産品のない町では良い土産物にと

なると感じました。家庭にとっては新たな現金収入の手段ともなり、同時に町の観光振興にも役立つため、一石二鳥であると思います。



マングローブの苗木

—地域にあった取組みが行われている点が印象に残ったということですね。

**鍵井** そうですね。それから、“ECANゾーニング(環境地図の策定)”は、はじめ説明を受けた際には難しいことのように感じました。しかし、実は私が住んでいる鎌倉でも住民協定というものがあり、建造物の制限と自然保全地域の区画がなされています。そのような規範があることで、安全性が確保され、将来を見据えた生活設計を行うことができます。また、豊かな自然と共生することで、私自身は非常に住みやすいと感じています。開発区域の限定、制限をコンセプトとす

るECANゾーニングは、これから発展していくフィリピンにおいて必ず実践して行ってほしいと思いました。



生活支援プログラム  
(デモンストレーションショップ)



—今回視察いただいた2事業のような自然環境を取り巻く事業において、今後、どのような側面をもっと強化していったら、よりよい事業になっていくと思われますか。

**鍵井** 今回の北部パラワン持続可能型環境保全事業では、エコツーリズムの振興という側面も支援しているようですが、実際にエコツーリズムを推進している国内外の地域を訪れて私が感じたことは、エコツアーガイドが非常に活躍している点です。フィリピンには海、陸ともにまだまだ豊かな自然が残っています。特にエルニドは黒大理石の奇岩が織り成す景勝地に恵まれ、その分野では最も期待される場所であると思います。これから観光大国として発展していこうとするならば、エコツアーガイドの育成といった面も視野に入れていってはどうでしょうか。JBICさんにもそういった環境保全事業を積極的に支援して行ってほしいと思います。また、これを機に皆さんにも、円借款事業を知っていただき、世界における日本の役割、責任をもっと知ってほしいと思いました。

空から見たエルニド村



© Yasuaki Kagi